

あまり“個性”に磨きをかけないキャリア・カウンセリングを

子ども家庭教育フォーラム代表(教育・心理カウンセラー) 富田富士也

昭和 45年に私は中学校を卒業すると寮付の工場に就職した。卒業生99人のうち就職者は6人だった。それぞれ事情を抱えていたが、私は父親の経済援助を受けたくなく、喧嘩ばかり繰り返す両親から逃げ出したかったからだ。だから、労働条件が良く、寮があれば良かった。「好きな仕事」は二の次で「嫌いな仕事」でも“自己実現”への道は切り開かれたことになる。また、「一生続く仕事に就く」とは思っていなかった。そもそも仕事なんて合うときもあれば、合わないときもあると思って就職し、働いた。

だいたい私の父親は三味線でもひいて、唄の一つや二つうなって食べていけないのかと心ひそかに思っていたような人である。その父親が毎日、松ヤニを体いっばいつけて、木を切り、妻も働かせ、日銭で生きていた。その姿を日々、間近に見ていれば、「好きな仕事」についていないから「ダメな人生」

「自己実現の乏しい人」などとは思えなかった。

私はその後、20年間に7つも会社を変えていくが、それほど就職を「一大事」と考えたりすることはなく、楽観的に流れにそって務め、気がついたら比較的、心と体になじむ「カウンセラー」という仕事についていたような気がする。

そんな私が満たされない会社勤めの“埋め合わせ”として中卒10

年目に関わり始めたのが、教育相談ボランティアだった。そこで私は相談に訪れる若者のある層に驚いた。それが10年後に問題提起した「引きこもり」というコミュニケーション不全に悩む若者たちだった。

彼らの多くは「登校拒否・高校中退の後」の帰属する場を家庭以外にはもたず、ひっそりと生きていた。共通した悩みは集団の中の人間関係。そのなかで、立ちずくんでいるのである。「ブータロー」「ナマケモノ」「ヤクタタズ」「ヘンジン」とも、呼ばれていたが、彼らの苦悩は「人と触れ合ってみたいのに触れ合えない」ところにあった。それに、集団の場が学校から職場に変わっただけで、「就職=大人」という壁に新たに、ふさぎこんでいたのである。

「働く意欲はあるが傷つくコミュニケーションを乗り切る自信がない」と相談室で呻吟し、引きこもる若者たちは、けなげな存在に思えた。子育て段階から身につけるソーシャルスキルの未熟さが共通の課題だったからである。親世代は労働を通じて人とつながる社会性を、貧しさを乗り越える手段も含めて獲得していったにもかかわらず、わが子には、悲喜こもごもの現実を見せて、語る事がなかったのである。

登校拒否は卒業・就職(定職)拒否となり、引きこもりの悩みは、



「フリーター」という“おしゃれ”なネーミングで市民権を得ていった。

「個性にあった、一生続けられる仕事が見つかる日」まで、フリーターを続ける若者たちが、確実に増えている。そして、自分の子には「好きでもない仕事には就いてほしくない」と大学卒業まで言ってきた親が、わが子と共にきて「ブラブラして困る」と私の相談室でなげいている。そんな若者たちに個性とか自己実現に磨きかけた「キャリア・カウンセリング」は憤りたいと思っている。その方向によっては「好きな仕事につけない人間はダメな人間」という“誤解”を与えかねないからである。

その代わりに、私は就職することについて「人は孤立しないで、人とつながるために、職を手段に第三者とコミュニケーションして、自立していくのですよ」と語って聞かせる。

仕事の好き嫌いで自己実現が決まるわけではないからである。